

# 北陸街道、今石動の町を往く

2019. 05. 05 to

本稿では、大名行列時代の街道町の種々様相を展望俯瞰し、生活模様を現代的視点で述べることにします。対象は、北陸街道の今石動の町とします。理由は、県境の町であり、原始・古代より文化が栄え、山麓・平野・河川のおりなす地形が街の構成を特徴付けているからです。

## 1.はじめに

北陸街道の宿場「今石動」に着目して、街の成り立ち、流通交易、文化、生活について、地形的、地理的、歴史的視点からの考察を織り交ぜながら「今石動」町の特徴を論述することにした。

## 2.今石動町

### (1)町の位置：

今石動は西側県境にある宿場町であり交通の要所である。西には俱利伽羅峠を介して津幡、北東には高岡、東には戸出・中田、南には津沢・砺波・城端が位置している。

### (2)町の歴史：

今石動は、省内では縄文期から氷見に次いで繁栄の地である。奈良時代には埴生八幡宮(写真1)が建立され、西からの交易路は俱利伽羅峠(写真2)を経て埴生に入った。八幡宮は当時から地域のシンボル的存在であった。

大規模な町となったのは、寛永年間以前からという。街の中心部は今の商工会館付近一帯であり、ここには奉行所があり、お膝元はもちろん氷見、高岡、砺波、戸出、城端、までもが奉行の管轄域であった。なお奉行所の側面には御旅屋があり、正面には本陣があった(絵図では印☆、後出節4)。

### (3)町勢：

人口は4000~5000人。当時の富山城下の人口が1.7万人と比較しても、今石動は当時としては大きな町であった。

### (4)米の積み出し中継点：

今石動は加賀藩管轄富山西部域の米積み出し拠点であった。砺波米の大半(加賀藩100万石のうち20万石程)が今石動に集積され、小矢部川左岸には加賀藩の米蔵が並んでいたといふ。

### (5)産業：

商業が中心であり、街道には商店や宿屋

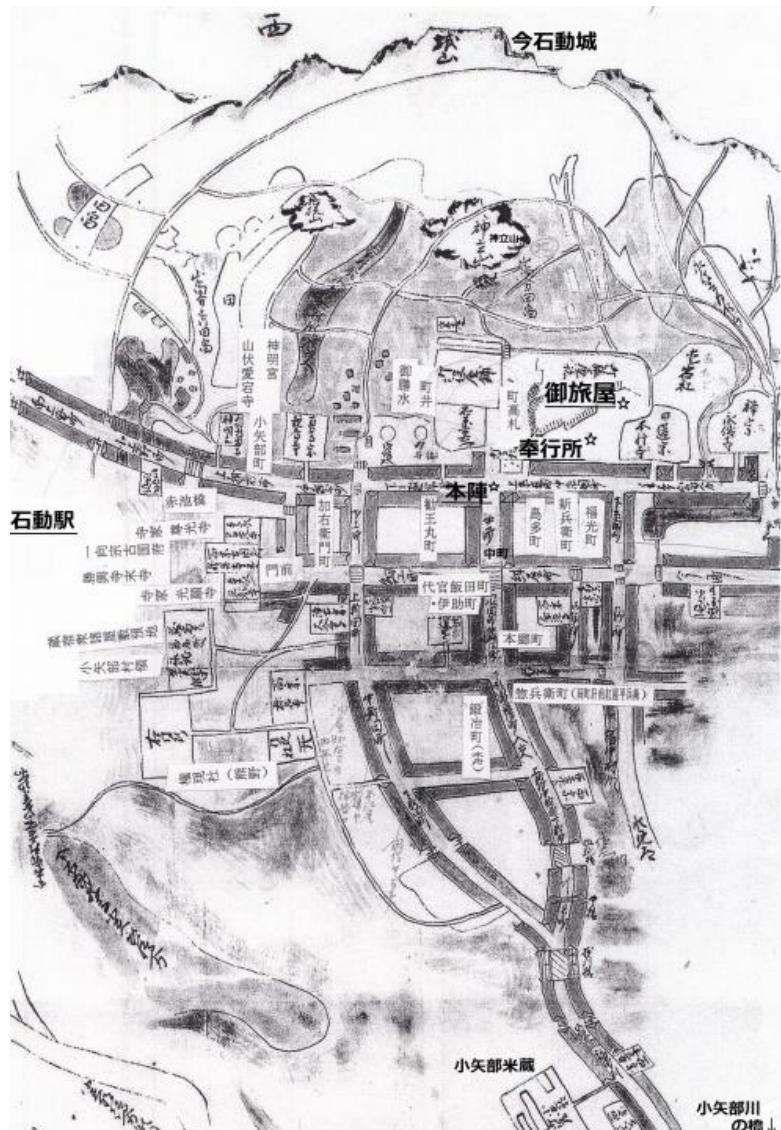
がびっしりずらりと立ち並んでいた。とりわけ、加賀藩米蔵の町として米屋が40数軒もあったといふ。

商店については、門前通り西側には呉服店が軒をずらりと連ねていた。この他、古道具屋があり、町外れ(鍛冶町)には鍛冶屋も多かった。呉服店については1950年代頃まで栄えていた。

商人の懷具合は、本業の他に、こっそりと百姓から買い取った農地からの年貢により大いに潤っていたといふ。

### (6)北陸道、街中では：

街道は昔から洪水で水没を避けるために、少しでも標高の高いところに敷設されていた。江戸期に入ると交易の利便性から、街道は低標高の平地を通るように、



絵図 今石動絵図 bv 文献1)に牧野氏加筆 印☆が御旅屋と本陣

昔あった街道を全体的に東に(平野側に低い方向に)数十メートル平行移動させたという。

いまひとつ、街道に特徴がある。街中や街外問わず、幅員が6mほどあったという。理由は今も分からぬ。  
(7)水道網：

江戸期以前の街道は上述のように全体的に標高の高い西側に位置していた。そこには綺麗な水の出る井戸があった。そこからくみ上げられる水は御膳水と呼ばれていた。

今石動の町(低地)の井戸水には鉄分が含まれていて赤茶けた水であったため、町内では御膳水横の町井から汲み上げた清水が竹トイで作られた水道網(網の程度は不明)により供給されたという。そんな御膳水・清水の井戸も1960年代に埋められた。

なお、御膳水井戸の周辺には各種の施設がつくられたという。

(8)今石動の災害：

震災については、天正の大地震(1586年)では木舟城(福岡町寄)が倒壊し、城下も大打撃を受けた。火災については、寛政2年(1790)の大火で本陣は燃失した。

### 3. 交易路

(1)北陸道；

北陸道は、津幡から俱利伽羅峠をこえて埴生八幡宮を通り、今石動に入り、本陣からは東に折れ、小矢部川を渡り福岡、高岡へと走っている。このルートは近世中葉からであり、それ以前は、今石動からは、高岡を経由せず戸出・中田を通って富山に向かう(最短ルートの中田道が主であった。

脇街道として、南には砺波平野や城端に向かう道や、北へは山麓伝いに伏木や氷見に向かう道(高岡の国府への道)もあった。

明治11年には、新道がつくられ、俱利伽羅峠でなく天田峠をすることになった。今の国道8号線は天田峠をトレースで通過。

(2)参勤交代ルート；

加賀を出発した大名御一行は俱利伽羅からは、埴生八幡宮をへて今石動の本陣に入った。その後は戸出に向かった。しかし、戸出は町でなく村であったために、宿泊には何かと不便であったようで、寛永年間後に高岡の宿場としての規模や利便性に着目して高岡経由となった。かくして、福岡・高岡・射水のルートが主となつた。

(3)近世以前の交易路は山側に敷設：

街道の条件は冠水しないこと(洪水にさらされない)であるので、なるべく標高の高いところへの街道敷設が一般的であった。すなわち、近世以前には交易路は平野ルートではなく、山側ルートが主であった。例えば、富山西部域のルートは高岡を通るものでもなく、中田道でもなく、今の音羽線(国道359号線)あたりであったとい

う。木曾義仲の俱利伽羅への行軍は中田道とされているが、そのころは中田道も地質学的には湿地帯にあり、行軍は無理と証明されている(文献3)。

一方、街中の場合でも、街道は山麓近くの平野部では少しでも標高をかせぐように、高台上に敷設されることが多かった。今石動の場合がまさにその典型例である(節2項(6))。

(4)河川；

県西部には二大河川「庄川と小矢部川」に加えて、支川が幾条に流れている。各河川には橋は一本のみ架かっていたが、これとて近世になってから(小矢部川の橋は正保4年(1647))である。大名列期には橋はあったが、支川については浅瀬を利用して渡ったといわれている。



写真1 埴生八幡宮



写真2 俱利伽羅峠の山道

### 4. 御旅屋と本陣、その周辺 (絵図、写真3、写真4)

(1)御旅屋：

神立山の東斜面に建てられた平城のような大規模建物が御旅屋として使われていた。これは1650年代から運用、老朽化のため1724年で廃止となった。代わりに町家として本陣が1724年以降1850年代まで続いた。なお、本地域では、御旅屋を「おたや」よりも「おたびや」とよんでいたのではという。

(2)本陣・脇本陣；

・歴史：

江戸期はじめには御旅屋(当然本陣も)はなく殿様は寺院や民間の家に泊まることもあったという。1724

年に本陣ができ、殿様は本陣に、殿様以外の武士は脇本陣や寺院などに分散しての宿泊であった。(参勤交代は1636年に制度化)

- ・本陣・脇本陣の位置について；

本陣と脇本陣は町の中心である中町にあった。本陣は奉行所の対面に位置していた。宴会場ばんば会館(3階建て建物)の場所がかつて本陣である。そこには本陣跡といった看板はない。なお、脇本陣については、本陣前交差点から東方向数十mのところにあったという。



写真3 御旅屋跡

御旅屋跡地はかつて小学校敷地、  
今は共有グランド。本陣とは斜め対面



写真4 本陣と奉行所の跡

本陣跡に建つ建物。奉行所は手前駐車場。

## 5. こぼれ話

### ▲ 1 ; 加賀百万石の経済力

100万石の資産は今の価値にして如何ほどであろうか。米、蕎麦の値段や大工手間賃などをもとに文(もん)と円を関連づけると、1文=25円。一両=4000文=10万円~7万円程。当時一石が1両だったので(米の相場で値段が変動したもののがざっくり値)、よって一石=10万円。加賀100万石は1000億円ということになる。参考までに、富山県(人口100万人)の市町村を含めた年間予算が一兆円オーダー、これと加賀藩(人口13万人)の1000億円と比較すると、生活水準や経済状況の違いがあるとはいえ、加賀藩はかなりの経済力をもっていたといえる。なお、上記試算はあくまでも目安であることを断っておく。

### ▲ 2 :宿泊費用・宿泊状況

2000人(~4000人)御一行の宿泊費用を試算する。歴史の多くの資料では、一泊2食つきの旅籠だと150-200文ぐらい。一日には昼食代他で400-600文程が必要という。旅籠の数値をもとに推測すれば、私は(最低でも)一日一人の費用を500文と見積る。

今の価格では、一文25円として一日8000円程では、宿泊のグレード云々を抜きにして、2000人御一行様の一日の必要経費は1600万円/日といったところであろう。

宿泊の容量については、ビジネスホテルなら東横INN富山の客室300、全部で300人収容としても、7棟が必要という勘定となる。

### ▲ 3 ; 文化財

・縄文の土器等出土の一番多いのが氷見であり、次いで石動となっている。古墳については氷見が(小も含め)400基、石動が60基であり、とりわけ埴輪のある古墳は県内では氷見と石動の二基のみである。原始・古代より石動の文化水準は非常に高かった。

・石動は県境の地であるだけに防御施設として山城が12-13個程と多く、南北朝期や戦国期には大いに機能していた。今石動町の西には城山と呼ばれているところに今石動城があった。

### ▲ 4 :木曾義仲に関する伝承

・木曾義仲の合戦(1183年);合戦では松明つけた牛500頭が平氏の陣に突進という伝承がある。これに関する記述は読本で名高い源平盛衰記のみであり、中国の故事を下敷きにした後世の創作という。というのも、あの地域で500頭もの牛を山に移動させられたのか、(角に)松明つけた牛が前進できたのか、大いに疑問である。

・木曾義仲の行軍;義仲は中田道を行軍となっているが、実際はもっと山側ルートである。北陸道が平安期も江戸期も同じところという先入観をもつ人は現代の一部郷土史ファンにもおられ、これを高岡市が擁護している。これに対して、地形学的アプローチによって中田道説を否定している正論主張の郷土史家もおられる。

## 6. あとがき

本稿では、北陸街道の県最西部の宿場町「今石動」について、風土と歴史を生活模様としてまとめた。本稿で扱った史実や数値については、一般に周知とされているので、関連の出典は略とした。

末筆ながら、本稿執筆の際に郷土史家牧野氏、市教育委員会井氏にはお世話をなりました。記して謝意を表します。

## 参考文献

- 1)小矢部市史、今石動絵図
- 2)岡田氏・永井氏、増田氏の日本建築学会論文
- 3)坂井氏の郷土史論集「富山史壇」、2013論文